消えた〈東区〉

―織田作之助「夫婦善哉」論

上長根美知太郎

はじめに

織田作之助「夫婦善哉」（昭和十五・四、「海風」）において、物語の舞台に選定されている大阪はどのように描かれているのだろうか。

例えば川上由加里は、この物語に描かれた大阪は「矮小で、とぐろを巻いた幾つもの居住区のようなイメージ」であると指摘した上で、柳吉と蝶子が住む家の一階を「他人の住む空間」、「階段の上が彼ら夫婦の生活空間」とし、二階借りという生活様式に下町の構造の縮図を見出している。加えて、登場人物の家族形態をもとに、市電・鉄道、梅田駅と曾根崎新地、市・寺・遊郭にわたって、物語内の〈キタ〉と〈ミナミ〉を分類している(1)。また橋本寛之も、本物語における〈キタ〉と〈ミナミ〉に言及し、「柳吉と蝶子との間には画然とした境界線を引くことができるのであって、柳吉は自分の居住区に対する否定的感情から、蝶子を媒介にこの境界線を越えて、ミナミへの強い憧憬を表す」一方で、「キタは町の陰の部分として隠されてしまう」とし、その構造を柳吉と蝶子の心情に照らし合わせている。そして、〈キタ〉を切り捨て〈ミナミ〉に目を向けさせることで、「無駄のない簡潔にして印象的な」「架空の大阪」をつくり上げていると指摘する(2)。

こうした都市論的なアプローチは、初出時における杉浦明平の「すでに読む前よりして私はかういふ小説に無縁の衆生一人であらうと考へてゐたが、読み終へてますます私に縁のないものであつた。私はかかるものが文学であると一度も考へたことがなかつた」(3)という言葉に代表される、風俗小説的な視点による評価軸を再検討する可能性を秘めている。おそらく杉浦の評価は、風俗小説が表面的なリアリズムに傾斜し、小説本来の虚構性及び思想性が欠如していると指摘した中村光夫『風俗小説論』(昭和二十五・六、河出書房)の先駆けであり、風俗描写が人間の内面描写を描く補助的なものでしかないという問題意識を内包していたと思われる。都市に着目した読みは、杉浦や中村が問題とした、文学テクストの虚構性や思想性をめぐる認識を相対化する契機となり得る。

しかし従来の都市論的な試みでは、〈キタ〉と〈ミナミ〉に焦点化し、テクスト内空間を二項対立的に捉えるあまり、都市を相対化した表層的な分析に留まっている。こうした見方では、風俗描写の補助性を払拭することはできないだろう。そこで本稿では、二項対立的な図式そのものに疑いの眼を向けたい。「夫婦善哉」に立ち現われる大阪は、テクストに描かれた人物と適合するように造形された架空の都市だったのではないか。そこには、現実の都市との照合が見られる一方で、テクストには描かれなかった部分も存在するはずだ。

以下本稿では、テクストに立ち現われる都市と現実の都市との齟齬について検討する。それにより、このテクストにおける風俗描写は、単に補助的な存在ではなく、都市と人間とを深く関連付けるものであることを明らかにしたい。

一、〈キタ〉と〈ミナミ〉の問題点

「夫婦善哉」におけるテクスト内空間について、梅本宣之は「主人公の二人が熱海に滞在した一時期を除いて、柳吉の実家がある大阪の梅田界隈(キタ)と、蝶子の実家がある難波界隈(ミナミ)を主要な舞台としている」と述べている(4)。確かに、このテクストにおける主な舞台は、柳吉の実家がある梅田周辺と、蝶子と柳吉が暮らす難波周辺との〈キタ〉と〈ミナミ〉に二分され、この二つの領域を中心に物語は展開されると言えよう。では、ここで改めてテクストが示す〈キタ〉と〈ミナミ〉を確認したい。まず〈キタ〉は、次の三つの場所に集約される。

①梅田新道…柳吉の実家がある場所。
②曾根崎新地…蝶子が芸者として働く。柳吉と蝶子が出会う。おきん・金八と知り合う。
③梅田駅…柳吉と蝶子が駈落ちする場所。市外への出入り口。

テクスト内における〈キタ〉の描写はわずかにこの三つの場所のみであり、北は梅田駅から南は曾根崎新地までの極めて狭い範囲である。続いて、〈ミナミ〉は以下のような場所から構成されていると考えられる。

④上塩町…蝶子の実家がある場所。
⑤日本橋…蝶子が女中奉公として働く場所。柳吉と蝶子が二階借りし、蝶子がヤトナ（二回目）に出る場所。
⑥黒門市場…柳吉と蝶子が二階借りし、蝶子がヤトナ（一回目）に出る場所。
⑦千日前…柳吉が三カ月勤めた剃刀屋がある場所。
⑧高津神社坂下…柳吉と蝶子が剃刀屋を開業した場所。
⑨飛田大門前通り…柳吉と蝶子が二階借りし、関東煮屋・果物屋を開業する場所。
⑩島之内…柳吉が通院した華陽堂病院がある場所。
⑪天王寺…柳吉が入院した市民病院がある場所。
⑫下寺町…柳吉と蝶子がカフェを開業する場所。
⑬道頓堀・新世界など…柳吉と蝶子が食べ歩く、あるいは柳吉が放蕩する場所。

〈キタ〉に比べて〈ミナミ〉は広範囲に及び、北は島之内から南は飛田大門通りまでとなっている。以上を踏まえると、本テクストでは〈キタ〉の南限である堂島川周辺と、〈ミナミ〉の北限である長堀川周辺を境界線としたテクスト内空間が形成されていると考えられよう（図1）。

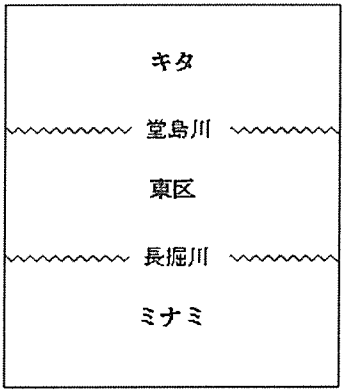

図1

しかし、〈キタ〉と〈ミナミ〉を二項対立の図式に回収することは、それ以外の部分を後景化してしまうのではないか。これに関連して橋本は、この作品を「点」と「線」の物語であると指摘した上で、近代的な交通網による「線」の消去を読み取っている(5)。確かにこのテクストには様々な固有名詞が「列挙」されており(6)、「線」が欠落することで「点」と「点」の物語を形作っている。これらの「点」を集約して〈空間〉としての意味を与える枠組みこそが、〈キタ〉と〈ミナミ〉であると言っても過言ではないだろう。だがその結果、橋本が指摘する通り、「線」の部分、すなわち〈キタ〉と〈ミナミ〉の間が消失しているのである。

この「間」を実際の地図に照らし合わせてみると、そのままほぼ「東区」に当たっている(図2)。つまり本テクストでは、東区が一切描かれていないのだ。この省略は極めて不自然である。なぜなら、柳吉と蝶子は(一度、種吉も柳吉の実家を訪ねている)、何度も〈キタ〉と〈ミナミ〉を往復しているにも拘わらず、その道程が記されていないからだ。

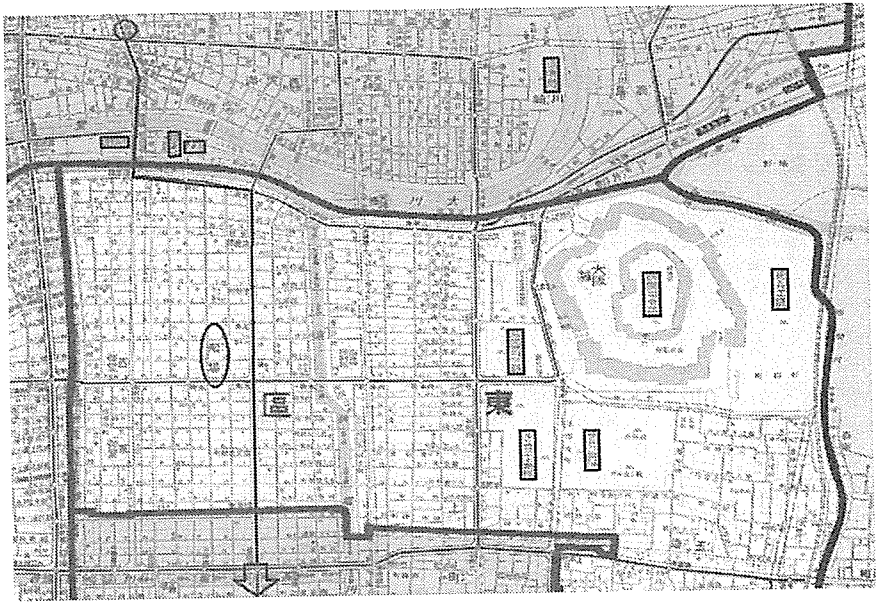

図2

その年も暮に近づいた。押しつまって何となく慌しい気持のする或る日、正月の紋附などを取りに行くと言って、柳吉は梅田新道の家へ出掛けて行った。蝶子は水を浴びた気持がしたが、行くなという言葉が何故か口に出なかった。その夜、宴会の口が掛って来たので、いつものように三味線をいれたトランクを提げて出掛けたが、心は重かった。（略）やっとおひらきになって、雪の道を飛んで帰ってみると、柳吉は戻っていた。（傍線筆者、七八頁）

この物語における時間設定は、大正四年から昭和十年頃までと特定できる(7)。この当時、梅田駅と難波駅を南北一直線に結ぶ御堂筋はまだ開通していなかった（昭和十二年全線開通）。したがって梅田新道から日本橋に至るには、大江橋を渡り、淀屋橋の交差点を左折した後、北濱二丁目の交差点を右折し、当時の主要道路である堺筋を真っすぐ南下していくルートが一般的であったと考えられる(8)。このルートを選んだ場合、必然的に東区を経由することが確認できる。にも拘わらず、物語において東区の描写は見られないのである。

では、〈キタ〉と〈ミナミ〉の通り道である東区の省略は何を意味し、テクストにおける都市イメージの形成にどのように寄与しているのだろうか。

二、消失する境界―東区

二・一、大阪城

東区の東側に位置する大阪城周辺は、陸軍発祥の地として発展した地域である。明治二年、兵部大輔に就任した大村益次郎は、大阪を軍事の中心的な都市とする大阪軍都論を提唱した。これを受けて同三年までには、兵学寮青年学舎（のちの陸軍士官学校）、幼年学舎（のちの陸軍幼年学校）、陸軍の中核である陸軍所（のちの陸軍省）、陸軍軍医学校、教導隊などの養成機関が次々と設置された。さらに明治四年には、東京・仙台・熊本に並ぶ全国四鎮台の一つとして、大阪鎮台（のちの第四師団）が設けられた。これは内国鎮圧を目的とする七大隊四二〇〇人から成る兵営であり、近畿・北陸・中国・四国にわたる広い地域の治安を担う大規模な機関であった。その後も、歩兵第八連隊（明治三年）、歩兵第七旅団（明治十八）、歩兵第三十七連隊が次々と整備され、近代の大阪の都市景観が形成されていった(9)。ここに、大阪城周辺の軍都的性質を見出だすことができる。

また大阪城周辺は、大阪の近代工業において重要な役割を果してもいた。そのシンボルこそが、明治三年に設置された造兵司（明治十二年に大阪砲兵工廠と改称、大正十二年に陸軍造兵廠大阪工廠と再度改称）である。ここでは主に、陸軍の需要に応じて大砲や砲弾、軍用車両などの製造を行っていた。後年、この大阪砲兵工廠（以下、砲兵工廠とする）について、開高健は次のように記している。

> 大阪市東区杉山町。ここには、もと、陸軍の砲兵工廠があった。戦争中、日本には七つの兵器工場があった。（略）そしてこの七つのうち、大阪陸軍造兵廠〔論者注、昭和十五年に陸軍造兵廠大阪工廠を改称〕はもっとも規模が大きかった。ほとんど日本最大といっても過言ではあるまい。ということは、アジアでおそらく最大の兵器庫だったということだ。(10)

明治政府は、西欧先進諸国の高い技術水準に追いつくために、採算を度外視した巨額の投資を続けた。加えて砲兵工廠側も、西欧諸国の優れた技術を意欲的に吸収していった。その結果、砲兵工廠は明治初期の早い段階で民間をはるかに凌ぐ技術力を保持し得たのである。その後も、日清・日露両戦争を経ることで、その設備はさらに拡充されていった。例えば大正八年には、当時はまだ民間では力量の及ばなかった大口径の鉄管を大量に鋳造しており、その技術水準はトップレベルにあったことが窺い知れる。この砲兵工廠の高度な技術は、次第に民間工業へと波及していく。特に、新設工場数が激増した第一次世界大戦期には、ロシアから受注した弾丸・信管を、技術指導を含めて民間に下請けするなど、大阪は砲兵工廠と民間企業との相互作用により、東洋一の「煙の都」へと発展を遂げていった。敷地面積三十五万六千五百坪、最盛期にはおよそ七万人の労働者が従事していた砲兵工廠は、名実ともに東洋一の兵器製造工場であるとともに、大阪における近代工業の指導的立場にあったのだ(11)。

以上のように大阪城周辺は、陸軍発祥の地としての強大な軍事的機能、さらには砲兵工廠に代表されるように、近代工業の中核を担う軍都・大阪の中枢であったと考えられよう。

二・二、船場

東側の大阪城に対して東区の西側には、周囲を

川・堀・溝によって囲まれた船場と呼ばれる平地が広がっている。こうした地形にあった船場は大阪城の城下町として開発され、東横堀川・西横堀川（現在は埋め立てられている）の両河川を通じて物資の流通が行われた。その歴史は古く、『言経卿記』（元禄三年）に「センハ町」という記述があることから、この頃には既に船場の原型が形成されていたことが窺い知れる(12)。以後、近世の大阪では、問屋や両替商に代表される商品流通が大阪城と大阪湾を結ぶ東西の通りに沿って盛んに行われ、近世的な経済が支配する場＝〈通り〉が形成されていった。このような商業の町としての側面は、明治以降も継承されていくことになる。

試みに大正十三年時の商人分布を見ると、衣装装身具・同材料販売業（二一五九二）、化粧品雑貨販売業（七三八）、紙・紙製品販売業（二八四）薬品染料販売業（五九九）、媒介周旋業（三一八）は東区が最多であり、一人当たりの平均納税額においても十三業種で一位となっている。そして、これら納税者の多数が船場に住居を構えていた(13)。ここから、船場は卸売を中心とした商業の街へと姿を変えていたことが読み取れる。

また大正期は、大規模商業の発達により、百貨店が躍動した時期である。これら百貨店のうち、三越（高麗橋）と白木屋（備後町）はともに船場にあった。開業当初の百貨店は、高級品・贅沢品を取り扱う敷居の高い店であった。しかし関東大震災以後、日用品販売の推進や土足入場の採用など、新しい商業形態を確立していった(14)。百貨店を中心に、人々の暮らしは近代色を帯びていくことになる。

さらに船場は、金融業が集中する街でもあった。明治二十六年の銀行条例の制定を受けて、大阪の銀行数は激増した。ここで興味深いのは、住友・鴻池・山口・北濱などの大銀行を含めた多くの銀行が船場に立地していた点である。その後、銀行数は変動していくものの、船場は依然として銀行が立ち並ぶ金融の中心地であった。そして銀行の周辺には、ビルブローカー・証券会社が立ち並び、船場は一大金融街として発展を続けていった(15)。

このように、かつて「天下の台所」の中心であった船場は、大阪の商業を表象する存在でありながらも、新たな商業の街へと変貌していたのだ。同時代資料の中には、この当時の船場について次のような記述がある。

船場の中でも、北方の中之島に接する北濱から、

今橋、高麗橋にかけての一角は、昔の金相場、秤座、両替店などの名残が銀行、ビルブローカー、交信所などの大建築物となつて、船場といふよりも、大阪の町の中で、最も力強い、立派な近代都市の建築層をつくり出してゐる。中之島―北濱、―堺筋、―高麗橋、南北線―この一画は、大阪における大建築物の集合するところとして、恐らく代表的なものであらう。(16)

右記の通り、昭和初期の船場は、南北を結ぶ主要道路・堺筋に沿って近代的な高層建築が立ち並ぶ、いわばビルディング街であったのだ(17)。したがって船場は、商業・金融業、さらには高級住宅街、ビルディング街に言い表されるような、近代的なエッセンスが凝縮された大阪随一の街であり、「キタ」と「ミナミ」を結ぶ、近代的な経済が支配する場＝〈筋〉の中核であったと言えよう。

二・三、延焼する〈東区〉

南北の〈筋〉が発展することで、東区は近代の大阪の象徴へと変貌を遂げる。ここで特筆すべきは、経済状況とそれに伴う労働運動によって、〈東区〉が大阪全体を席巻していく点である。大正初期の大阪は、銀行が密集する船場を中心に、日露戦争後の不況による小恐慌状態にあった。この経済状況を打破したのが、第一次世界大戦による軍需景気である。特に、軍需工業の熟練工などは多額の収入を得て、成金となる者が続出した。しかし大戦後の反動により、経済は再び下火になっていく。こうして経済の激しいアップダウンは、砲兵工廠や船場のビルディング街に大きな影響を及ぼした(18)。

時を同じくして、労働運動も活発な動きを見せる。大正四年、労働総同盟の前身である友愛会の大阪支部が結成されたのを端緒に、その動きは次第に盛んになっていった。労働運動はその後、同六年のロシア革命、翌年の米騒動を経て本格化していく(19)。砲兵工廠においても、大正八年に労働組合「向上会」が結成された。向上会は、結成当初から普通選挙運動に取り組み、翌年には東京砲兵工廠と連携して官業労働総同盟を結成している。また同年には、約五千人の労働者が中之島公園・天王寺公園間を行進した大阪初のメーデーが行われており、その総指揮者を向上会会長・八木信一が務めている(20)。一連の労働運動に密接に関わっていた砲兵工廠は、大阪における労働運動の拠点でもあったのである。

以上のように、戦争とそれに伴う経済状況、労働運動など様々な情勢が混じり合い混濁していた時期こそがテクスト内に描かれた時代であり、〈東区〉はまさにその渦中にあったと考えられる。しかし「夫婦善哉」にはこれらが記されていない。まるで、そのようなことはなかったかのように。これにより、現実の都市・大阪とは異なる「架空の町」大阪が、テクストの中に立ち現われてくる。そしてそれは、物語の中心であるはずの「キタ」と「ミナミ」をも歪め、当時の大阪のアクチュアルな側面を削ぎ落としてしまう。

三、歪められた「キタ」と「ミナミ」

三・一、新興の街―〈キタ〉

大阪の近代経済を象徴する〈東区〉の省略は、〈筋〉という経済色が排除されたテクスト内空間を演出するのではないか。

このテクストにおいて〈キタ〉は、主に柳吉の出身地として描かれている。柳吉は「中風で寝ている父親に代って」「理髪店向きの石鹸、クリーム、ポマード、美顔水、ふけとりなどの卸問屋」を経営している。その働きぶりは「厚子を着た柳吉が丁稚相手に地方送りの荷造りを監督」するほか、「耳に挟んだ筆をとると、さらさらと帳面の上を走らせ、やがて、それを口にくわえて算盤を弾くその姿がいかにも甲斐甲斐しく見え」るほどであった。ここから〈キタ〉における柳吉は、その商才を十分に発揮していることが読み取れる。

ここに描かれている商業形態は、近世における問屋のそれと酷似している。近世の大阪は「諸国取引第一之場所」であり、ここでの相場が全国各地の相場を決定する全国的な商品流通の中心であった。大阪に集まった各地の物産は、問屋、仲買、仲介人を経て市中の小売人や諸国の商人に販売された。そのため大阪は、数多くの問屋が軒を連ねる問屋都市であった(21)。これを踏まえると柳吉は、近世的な〈通り〉の商業形態による「商い」をしていたと考えられる。

しかし興味深いことに、立派に「商い」をする柳吉は、金銭を管理する能力が備わっていない。柳吉は父親に代わって店を切り廻しているにも拘わらず、家長である父から家計を任されることはないのだ。この点について川上は、柳吉の実家における家父長権の強大さを指摘し、「キタに生活していても、三十歳にもなって父親という権力行使者に従うことしか

できない柳吉はこの先、強大な家長権や父権を操ることができない」と述べている(22)。確かに、柳吉の父親は「寝付くとき忘れずに、銀行の通帳と実印を蒲団の下に隠」すため、「柳吉も手のつけようがな」い。そのため柳吉は、「得意先の理髪店を駆け廻っての集金だけで細かくやりくり」するが、「みるみる不義理が嵩んで」しまう。蝶子と駆け落ちするのも、わざわざ東京にまで「集金すべき金」を集めに行くためであった。こうして〈キタ〉は、柳吉の「金融」能力を奪い取ってしまう。

ここで言う「金融」とは、前章で触れたように、銀行や株式による近代的な経済活動を意味する。そして実際の「キタ」は、この近代的な経済のシンボルが散見される場であった。その一つに、梅田新道から大江橋を渡ってすぐの場所に建つ日本銀行大阪支店（明治三十六年）が挙げられる。ここでは手形の買い入れや地金銀の売買、国庫金の取り扱いが行われるなど、大阪の金融機関の中枢であった。日銀支店から道路を挟んで反対側には、府立図書館（明治三十七年）と公会堂（大正七年）が並立している。前者は当時の住友財閥総帥・住友吉左衛門、後者は大阪株式取引所の仲買人・岩本栄之助の寄付をもとに建設された。彼らはいずれも経済的に成功した人物であり、両者によって建てられた建築物は、大阪の経済を象徴するものであったと言っても過言ではないだろう。このほかにも、銀行間の手形交換を請け負う大阪手形交換所（大正十一年）、大阪の銀行業者による例会を行う大阪銀行集会所（明治四十年）、さらには貨幣の鋳造を担う造幣局（明治十年）が存立していた(23)。

このように「キタ」は、近代的な経済に関連する建造物が立ち並ぶ新興の街であり、ここに〈筋〉の性質を見出すことができる。すると柳吉は、この「キタ」の出身でありながらも、〈筋〉とはかけ離れた、いわば〈通り〉の人物であると考えられるのである。

三・二、混沌の街―「ミナミ」

次に、テクストの主な舞台である〈ミナミ〉を見ていきたい。第一章で述べたように、本テクストにおいて〈ミナミ〉は、柳吉と蝶子の生活空間として描かれている。まずはじめに、蝶子の実家について触れておこう。

蝶子の実家は、「路地の入口で牛蒡、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、鰯、鰯など一線天婦羅を揚げて商って」いることから、近世的な商いにより生計を立て

ていたことが読み取れる。しかし、ともに暮らす種吉とお辰との間には、経済的な視点において差異が見受けられる。例えば、種吉は「味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしている」一方で、お辰が揚げる天婦羅は「存分に材料を節約」しており、種吉が「肩身の狭い想い」をするほどであった。また、蝶子のもとに「河童横丁の材木屋の主人から随分と良い話があった」とき、お辰が「思いがけぬ血色が出た」のに対して、種吉は「ゆくゆくは妾にしろとの肚が読めて」「うんと言」わなかった。さらにお辰は、「こっそり郵便局の簡易養老保険に一円掛けで」加入していたことが死後に判明する。

ところで大阪の生命保険は、明治十四年、明治生命保険会社大阪出張所が東区伏見町に設立されたことに端を発する。後年には帝国生命保険会社大阪支店（明治二十一年）や日本生命保険会社（同年）がともに東区内に開業したことを契機に、明治中期の大阪は生命保険会社の乱立時代を迎える(24)。すなわち生命保険は、近代以降に普及した〈筋〉の産物であるのだ。したがって生命保険に加入していたお辰は、近代的な〈筋〉の性質を備えた人物であったと考えられよう。

このお辰に対して、蝶子は「見っともないとも哀れとも思」ってしまう。他方で種吉については、柳吉と重ね合わせて「しんみり父親の油滲んだ手を思い出」し、柳吉に対して「情緒が出」る。こうして蝶子は〈筋〉的なものでなく、〈通り〉の性質に惹かれていくのである。

このような環境下で育った蝶子は、彼女自身もまた〈通り〉の人物として成長していく。それが最も端的に表われているのは、蝶子の貯蓄能力であろう。その様子は「チラシを綴じて家計簿を作り」、「毎日の入費を書き込んで世帯を切り詰め」て「ヤトナの儲けの半分くらいは貯金していた」ほどであった。これにより、「二年経つと、貯金が三百円を少し超え」、あるいは「さん年経つと、やっと二百円たまった」のだ。こうした蝶子の気質は、近世の大阪から続く「しまつ」の精神に当てはまる。江戸期の鎖国令下の大阪では、他国との貿易の道は閉ざされていた。そのため、生活態度を引き締め、誠実に商売を続けるほかなかった。こうした情勢にあった大阪の商人の間に、「使わぬことも金儲け」という「しまつ」の精神が浸透していったのは当然の成り行きであろう(25)。貯金という行為に見出せる「しまつ」の精神は、蝶子が持つ〈通り〉の性質を言い表してもいたのだ。

では、〈通り〉の人物である柳吉と蝶子が生活を送

る〈ミナミ〉は、どのような場所として描かれているのだろうか。これに関連して真銅正宏は、道頓堀を中心とした新旧の大阪イメージの両義性を指摘しているが(26)、本テクストではこのうち「旧」の部分が前景化されているのではないか。その様子は、柳吉と蝶子の食べ歩きの中で端的に表われている。

本真にうまいもん食いたかったら、「一ぺん俺の後へ随いて……」行くと、無論一流の店へはいらず、よくて高津の湯豆腐屋、下は夜店のドテ焼、粕饅頭から、戎橋筋そごう横「しる市」のどじょう汁と皮鯨汁、道頓堀相合橋東詰「出雲屋」のまむし、日本橋「たこ梅」のたこ、法善寺境内「正弁丹吾亭」の関東煮、千日前常盤座横「寿司捨」の鉄火巻と鯛の皮の酢味噌、その向い「だるまや」のかやく飯と粕じるなどで、何れも銭のかからぬいわば下手もの料理ばかりであった。(七三頁)

ここで挙げられているのは、当時実在していた庶民的な飲食店である(27)。ほかにも彼らは、法善寺の「花月」へ春団治の落語を聴きに行ったり、下寺町の竹本組昇のもとで浄瑠璃を習うなど、〈通り〉の世界に生きていることがわかる。つまり〈ミナミ〉は、近世の大阪を連想させる「庶民の町」として描かれているのだ。だが実際の「ミナミ」は、エロ・グロ・ナンセンスに代表されるモダニズム文化が流入していた地域でもあった(28)。この当時の道頓堀については、次のような記述がある。

電飾と雑音の交響曲。それに一段の近代味を加へて道頓堀は、最近、昭和年代に入るとともに、一層狂燥的乱舞時代に入つてしまつたものとも云へるだろう。それは云ふまでもなく、従来の芝居町としての盛り場の雰囲気に加へて、大小数十にあまるカフエーの進出に拠ること無論であつて、南側に厳然伝統を誇る五つの櫓と松竹座を加へる六個の劇場に対して、強烈なる電飾とジヤズの狂燥曲を浴びせかけて、新興カフエーは、茲に人気吸集の一大挑戦を開始したのである。(29)

右記の通り、新しい文化と伝統的な文化が渦巻く場所、それこそが「ミナミ」であったのだ。島村輝は、エロ・グロ・ナンセンスとプロレタリア文学運動の関連性を指摘し、両者の共通点を「「安寧」と「風

俗」という両面からの「壊乱」であった」と述べているが（30）、テクスト内の〈ミナミ〉は「壊乱」とは無縁の「古き良き町」として描かれている。つまり、大阪の新旧イメージのうち、「旧」が強調されることで、「新」の部分が消えているのである。

おわりに

これまで見てきたように、このテクストにおける〈キタ〉と〈ミナミ〉は、近世的な〈通り〉の性質が前景化されることで、〈東区〉に見られるような〈筋〉の性質が削除されていると考えられる。「夫婦善哉」の物語世界には、経済や労働運動などのアクチュアルな大阪の描写は必要なかったのであろう。そして同時代背景としての〈筋〉の都市景観の消去は、虚構のテクスト内空間としての「庶民の町」大阪を浮上させている。いわば本テクストでは、〈筋〉の物語が削除されているのである。

ところで〈通り〉の性質を持つ柳吉は、彼の出身であるキタを出入りし、テクスト末尾で蝶子のもとに帰る。しかし、柳吉の〈筋〉への眼差しは、決してなくなっていたわけではない。彼は〈通り〉と〈筋〉の間で葛藤を続けていたのではないか。それは、二人が法善寺境内の「めをとぜんざい」で善哉を食べる場面からも明らかである。

> 碁盤の目の敷畳に腰をかけ、スウスウと高い音を立てて啜りながら柳吉は言った。「こ、こ、ここの善哉はなんで、二、二、二杯ずつ持って来よるか知っているか、知らんやろ。こら昔何とか大夫ちゅう浄瑠璃のお師匠はんがひらいた店でな、一杯山盛にするより、ちょっとずつ二杯にする方が沢山入ってるように見えるやろ、そこをうまいこと考えよったのや」蝶子は「一人より女夫の方が良えいうことでっしゃろ」（九八頁）

柳吉が「沢山入ってるように見える」ことを「うまいこと考えよった」と評する一方で、蝶子は「一人より女夫の方が良えいうことでっしゃろ」と言う。柳吉の経済的な視点に対し、蝶子は柳吉とのつながりをそこに見ているのだ。

このテクストでは、語りは常に蝶子に寄り添っていた。蝶子の目には、〈東区〉はもちろんのこと、中之島の洋風建築物やモダンな道頓堀の風景は映っていない。彼女には何よりも、柳吉とともに暮らすこ

とが最優先であったのだ。〈東区〉の省略には、柳吉と蝶子の心的距離をも看取できよう。

以上のように、本テクストでは「庶民の町」以外のコードを抹消することで、どこか懐かしい〈古き良き町・大阪〉という空気感を生み出すとともに、柳吉と蝶子の間に心的距離を感じさせる、一種のパースペクティヴを生み出しているのである。

注

（1）川上由加里「織田作之助『夫婦善哉』―都市の記号からのアプローチ」、平成九・十二、「京都教育大学国文学会報」。

（2）橋本寛之「虚構の町　織田作之助『夫婦善哉』」、『都市大阪　文学の風景』（平成十四・七、双文社出版）所収。

（3）杉浦明平「余りに戯作的な―」、昭和十五・六・十七、「帝国大学新聞」。

（4）梅本宣之「漂流する〈私〉―「夫婦善哉」を中心に―」、平成二十二・二、「帝塚山学院大学日本文学研究」。

（5）(2)と同。橋本はこの中で、「点」を地名あるいは停留所名、「線」を交通網としている。

（6）真銅正宏は『食通小説の記号学』（平成十九・十一、双文社出版）の中で、「下手物」を「列挙」することで強調される「大阪らしさ」を指摘し、そのリズム感を登場人物に結びつけている。

（7）冒頭に「蝶子十二歳」とあり、蝶子が二十歳の時に関東大震災（大正十二年）に罹災している。また、蝶子が十七～二十歳の間に三十一歳の柳吉と出会い、末尾の種吉宛の柳吉の手紙に「自分ももう四十三歳だ」という記述がある。

（8）(2)においても同様の指摘が見られる。図2参照。

（9）大阪府編『大阪百年史』、昭和四十三・六、大阪府。

（10）開高健「日本三文オペラ」、昭和三十四・一・七、「文学界」。なお、引用は新潮文庫版（三八頁）に拠った。

（11）大阪砲兵工廠慰霊祭世話人会編『大阪砲兵工廠の八月十四日―歴史と大空襲』、昭和五十八・八、東方出版。

（12）新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史第三巻』、平成元・三、大阪市。

（13）大阪市東区役所『東区史第三巻　経済篇』、昭和十六・十二、清文堂。

（14）(9)と同。

（15）(13)と同。東区には藤本、益田、野村などがあった。

(16) 北尾鐐之助『近代大阪』、昭和七・十二、創元社、二六三頁。なお本稿では、復刻版（平成元・三）を参照した。

(17) この背景には、梅田駅を中心とした「キタ」の開発が密接に関わっている（岡本良一・守屋毅編『明治大正大阪図誌第十一巻　大阪』、昭和五十三・九、筑摩書房）。

(18) (9)と同。

(19) (9)と同。

(20) (11)と同。

(18) (9)と同。近世では、問屋と仲買は区別されており、仲買は問屋と小売人、あるいは生産者・荷主との間に立ち、自分の名前で大量取引をするものであった。明治四年に蔵屋敷が廃止されて以降、問屋と仲買との営業は混同し、小売に対してこれを卸売と呼ぶようになる。

(22) (1)と同。

(23) (9)と同。

(24) (9)と同。

(25) 香村菊雄『定本船場ものがたり』、昭和六十一・十一、創元社。

(26) 真銅正宏「大阪のモダニズム」、真銅正宏編『コレクション・モダン都市文化第二十巻　大阪のモダニズム』（平成十八・五、ゆまに書房）所収。

(27) これらの店名は、松崎天民『京阪食べある記』（昭和六・一、誠文堂、(26) 所収）の中にも見受けられる。

(28) 橋本寛之も「織田作之助『夫婦善哉』論」（平成四・六、「阪南論集人文・科学編」）の中で、同様の指摘をしている。

(29) 日比槃治郎『道頓堀通』、昭和五・九、四六書院、三四五頁、(26) 所収。例えば、赤玉食堂やユニオン、美人座など。また、松竹座にはキネマ館が併設されていた。

(30) 島村輝「エロ・グロ・ナンセンス」、島村輝編『コレクション・モダン都市文化第十五巻　エロ・グロ・ナンセンス』（平成十七・十一、ゆまに書房）所収。

［付記］

本文の引用は、『定本織田作之助全集第一巻』（昭和五十一・四、文泉堂）に拠った。また、旧字は適宜新字に改めた。なお、図2に掲載した地図は、国際日本文化研究センター所蔵地図データベース内の「大阪市街大地図」（http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/images/2464899.html）をもとに、論者が説明を加えたものである。